

瀬戸内島しょ部における柑橘生産の品目多様化と出荷対応 —「大長みかん」産地を事例として—

矢野泉*・田村友梨**・田中秀樹*・板橋衛*
(*広島大学大学院生物圏科学研究科、**香川県農協)

1 問題意識

わが国の柑橘農業は、農業基本法の下、選択的拡大部門として成長し、全国に大規模専門型の産地が形成された。同時に、農業協同組合による大型共販が柑橘産地の展開を下支えしてきたといえる。しかしながら、国内の柑橘産地は、1960年代後半以来続くミカン価格の低迷、産地間競争に加え、生産者の高齢化や消費者の柑橘離れが急速に進んでおり、大型産地、大型共販による供給体制の維持が困難になっている産地も多い。

そうした中、水はけのよい急傾斜を中心に展開してきた瀬戸内海沿岸や島しょ部の柑橘類の産地は、作業の省力化を模索しつつ、同時に価格が低迷する温州ミカンから他の柑橘類への品種更新や高品質化へ取り組んでいる。しかし、作業の省力化はコスト低下をもたらす一方で生産過程の粗放化による品質低下の危険性を孕んでおり、多様な品目構成や高品質化への取組みを既存の販路の中でどのように生かしていくか、あるいは新しい販路をどのように確立していくか等、さらなる課題が顕在化してきている。

2 課題と方法

本報告では、瀬戸内海の島しょ部に位置し、「大長みかん」という温州ミカンの全国ブランドの産地として知られる広島県呉市豊町を事例に、上述の課題への具体的な取組みの現段階的到達点と今後の展望について明らかにする。

具体的課題としては、第1に柑橘類生産の品目多様化の歴史と現状を整理する。第2に、豊町における柑橘農業の変遷について整理し、地域の柑橘農業が抱える今日的な問題点を明らかにする。第3に、町内の認定農業者を中心とした聞き取り調査より、品目多様化に対応する個別農家の課題と展望を明らかにする。第4に、以上をふまえ、1ブランド産地から多品目産地として展開しつつある今日の方向性に対して、個別農家、農協、町が各々取り組むべき課題を明らかにする。